
恋姫無双～新・外史～

wingzero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜新・外史〜

【Nコード】

N3244X

【作者名】

wingzero

【あらすじ】

代々、精霊を従えし一族北郷家。

18代目当主北郷一刀は、学園からの帰り道まばゆい光に包まれ異世界へと飛ばされた。飛ばされた世界は、男女逆転している三国志の世界。

今までとは、違う北郷一刀の新たな外史の物語が今始まる。

第1話：御遣い異世界に立つ

気が付いたら、周り広がる大地。

見えるものは、山と少し遠いが森がある。

「・・・・・・・・・・」

「どこだよここはあああああああ！」

時間は少し遡る。

学園からの帰り道、俺、北郷一刀は家に帰る途中で見たことのない鏡を見つけた。何時もなら落ちている物なんか気にならないのにその時だけは気になって仕方なかった。鏡を拾うと彼女たちが話しかけてきた。

「一刀様、それは？」

「見たことない鏡ですねえ、主様」

「昔の鏡に似ていますよ、当主様」

「危険ではござらぬか？一刀殿」

上からフィリア、ウィリア、フリー、ドーリアが話しかけてきた。彼女たちは一刀に従う四属精霊の精霊王。

火の精霊王フィアナ水の精霊王ウィリア風の精霊王フリー地の精霊王ドーリア

代々北郷家は精霊を従えている一族である。

「んゝなぜか分からないけど、きになるんだよなあ」

のんきな声で発しているがその鏡を警戒しながら調べていると、突然鏡が光りだした。

「「「「!?」「」「」

「一刀様!!」

いきなり眩しい光が目の前に広がったので不意をつかれた一刀達だがフィアナだけがその鏡を壊そうとする。

しかし、壊そうとするが間に合わずまばゆい光に全員呑み込まれた。

「うわああああああ」

「「きやああああ」

「「一刀様（殿）私達に掴まってください」

まばゆい光が徐々に消えていき、恐る恐る目を開けてみると、広大な大地に立っていた。
時間は戻り現在

「みんな無事か？」

「私は大丈夫です一刀様」

「わたくしも問題ありません主様」

「わたしもだよ当主様」

「同じく何ともございません一刀殿」

彼女たちの無事を確認し一体何が起きたのか考えていると、後ろから3人の殺気を感じた。

振り向くと黄色のバンダナをした男三人が一刀を見てにやにや笑っている。

リーダーらしき男が「おい小僧。良い物持っているじゃねえか。」
ちび男が「着ているものと、腰につけている変な剣を置いてどっかにいきな。」

腹が出ているデブ男が「だ、だなあ。そ、そぢだら、命だけはみ、みのがしてやるんだなあ」と言ってきた。

男達は一刀にそう言々と武器を出しさらに脅そうとした。

しかし、「何言ってるんだ、テメエら!!」と言つと同時に殺気を出す。

「「な、なんだコイツ!!??」」

「こ、こわいんだなあ!」

デブ男が逃げようとするが、

「どこに行くのかしら」

「主様に喧嘩売つていて逃げるの?」

「なさけないなあ」

「一刀殿を脅かしといて命があると思うか?覚悟しろ!」といきなり4人の女性が宙に浮かんで現れた。

「ひ、ひいいい！！」

「あ、妖だあ！」

「よ、妖術づかいなんだなあ」

と3人は腰を抜かし逃げようとする。

それもそのはず、精霊たちは自分の姿を相手に見せる見せないことができる。普段は一刀だけに見えているようにしているため、人前に出てきたのは実は久しぶりなので4人とも上機嫌である。

「ふゝ、あまり人前に出るなって言っているのに・・・、おいお前ら！！死にたくなかったら俺の目の前から失せろ！！」と怒声をあびると

「「す、すいませんでしたゝ（だなあ）」」と逃げていった。

「大丈夫ですか？一刀様？」

「ああ。大丈夫だよフィリア」

「これからどうするゝ主様」

「とりあえずどこかに村か町があれば良いんだけど・・・」

「？一刀殿。向こうからなにやら来ますぞ」

ドーリアが指差した方を見ると馬に乗った軍らしき人らがこつちに近づいてきている。一刀たちの目の前に止まると銀色の甲冑を着た男たちの間から1人の女性が出てきた。

「お前が天の御遣いか？」

ここに、北郷一刀の新たな外史が始まる。

第1話：御遣い異世界に立つ（後書き）

初めまして。

wingzeroと申します。

初投稿なので誤字脱字や変な文章が多々あると思いますが、

「まあwingzeroだからなあ」てな感じで暖かい目で読んでください。

では、北郷一刀の新たな外史のはじまり！

第2話：一刀、謎の人物に出会う（前書き）

謎の人物とは：

第2話：一刀、謎の人物に出会う

「お前が天の御遣いか？」

銀色で髪を背中ぐらいまでに伸ばしている20代位の女性が一刀に向かって話しかけてきた。

（天の御遣い？聞いたことがないぞ）

（ ）は心の声です。また、一刀と精霊たちとの念和にも使います聞き覚えのない単語に一刀は首をかしげる。

「俺は、北郷一刀と言います。日本の東京浅草区出身で、北郷家第18代目当主です。すみませんが、天の御遣いとは何ですか？」

「忒本？東協？朝草？聞き覚えのない地名だな」

（聞き覚えのない？ここは一刀様が暮らす日本ではないのかしら・・・）

フィアナが疑問に思っていると

「天の御遣いについてだな。すまないが私にもよく分らんのだ。詳しくは慮植様がお教えになる。付いて来い」

（慮植ってたしか！三国志の偉い人物と同じ名前じゃなかあ）

（フム・・・一刀殿の地名を知らない。それに昔の人物の名前・・・）

（もしかして、ここは！？）「当主様！！」

いきなりフリーが声をかけてきたので周りの兵士は何事かと声の出所を探す。

「・・・もしかして今の声聞こえました？」

一刀は斧みたいな武器を構えている女性に声をかけた。

「あ、ああ。天の御遣いよ、今の声について知っているのか？」

「知っているものにも、ああ説明するよりも見てもらったほうが早いですね。フィリア、ウィリア、フリー、ドーリアもう良いよ、出ておいで」

すると、一刀の周りに宙に浮かぶ女性が現れ武器を構える兵士たちに緊張がはしる。

「い、いきなりでできたぞ」

「妖なのではないか？」

次々と兵士たちが不安な言葉をはなっている中

「天の御遣いよ。こ、この者たちは？」女性が武器を構え警戒しながら一刀に聞く。

「大丈夫ですよ。彼女たちは俺に仕えている精霊だよ」

精霊と言う言葉に兵士たちが驚く

「お、おい今」

「ああ、確かにセイレイって言ったな」

「噂の予言通りじゃねえか」

兵士たちがまた次々と話し始める。

そこに

「華雄」

「慮植様！」

「あなたが来るのが遅いから心配になって来ちゃった」

テヘツと舌を出しながら笑っている茶色の髪で肩まで伸ばしている女性が現れた。

「あなたが、天の御遣い様でよろしいのかしら？」

「あの、だからその天の御遣いって何なのですか？」

未だに知りたいことを知れていない一刀はちよっとうな垂れていた。

「あら、ごめんなさい。てつきりご存知なのかと。わかりました、説明させていただきますので私達に付いて来て下さい。」

（・・・みんなどうする？）一刀が念話でフィリア達に聞いてみる

（よろしいかと思えます）

（ウィリアもフィリアに一票）

（わたしも大丈夫だと）

（とにかく今はその慮植殿の話を聞いてからにしましょう）

みんなの意見を聞いて「わかりました」と答える。

「よかった。もし、一緒に来てくれなかったら無理やりにでも連れて来いって言われていたの。よかったわあ、天の御遣い様と戦うなんて絶対嫌ですから」

と笑いながら話しかけてくる

（（断っていたらやばかった））

場所は変わりとする町の宿屋

「さて、改めて自己紹介ね。私、姓は慮、名は植、字は子幹。漢に仕え氏者よ」

「私は、姓は華、名は雄、字は葉雄。私は洛陽を治めている董卓様の武將だが、今は慮植様と一緒にとある任務にあたっている」

「俺の名前は北郷一刀です。」

「？変わった名前ね。姓が北で名が郷で字が一刀で良いのかしら？」

「いえ、姓が北郷で名が一刀です。字とかはとくにありません」

「なんと！？変わった名前の付けかたをするのだな天の国は」

（？天の国？）

「所で後ろにいる人たちは？」と慮植がフィリアたちを興味津津で聞いてきたので紹介する事になった。

「赤色の髪をしているのがフィリア」

「初めまして。私、一刀様に仕えているフィリアと申します」
フィリアは礼儀正しく挨拶する。

「次に、青色の髪をしているのがウィリア」

「初めまして。わたし、主様に仕えているウィリアっていいます」

とてもフランク挨拶するのがウィリア流。

「次に、緑色の髪をしているのがフリー」

「当主様に仕えているフリーと申します。よしなにフリーは少し京まじりの挨拶をする。」

「最後に、茶色の髪をしているのがドーリア」

「初めてお目にかかります。わたし、一刀殿に仕えているドーリアと申します。以後よろしくお願いいたします」
ドーリアは少し堅い挨拶がお気に入り。

「よろしくね。ところで、御遣い様？」

「あの、御遣い様って呼ぶのやめてください。なんだか自分の事じゃない気がして・・・」

「あら、そうなの？ふふ、わかったは、では一刀君って呼ばせてもらうわね。所で、後ろにいるフィリアちゃんたちはセイレイっていう存在でいいのかしら？」

「「「「「！！！！！！？？？？？」」「」「」「」

突然な質問だったので一刀たちは驚いてしまった。驚いたことで慮植は確信した。（この子はまさしく天の御遣い様だわ）と

「すみません、慮植様。なぜ、私たちが精霊だと御分かりになったのですか？」

フィリアが慮植に聞いてみる。後ろでウィリア、フリー、ドーリア

は首を縦にうんうん何で知っているの？という顔して返事を待っている。一刀はそのウィリアたちの顔を見て和むと同時に慮植の返事を待っている。

「そうねえ。とりあえず、最初から話した方が良いのかしらねえ華雄？」

「そうですね。いきなり、天の御遣いだのセイレイだろといわれても戸惑いますのでまずは、管輅の予言から話してみてはいかがですか？」

「そうね。では、お話しますね。少し長いけど許してね。」

とウィンクすると真剣な顔になって話し始めた。

「一ヶ月前、漢の国全域に渡った管輅の予言が事の始まりなの」

第2話：一刀、謎の人物に出会う（後書き）

慮植と華雄でしたあゝ

え？なんで慮植と華雄の二人なのかって？

・・・まあオリジナルストーリーなのでww

ぜひ暖かい目で見てください！お願いします！

次話は今のところ管輅の予言の内容+@の予定です。

第3話：管輅の予言、皇帝の願い（前書き）

管輅の予言とは？

そして・・・

第3話：管輅の予言、皇帝の願い

一刀たちがこの世界に着く一ヶ月前、ここ長安は普段と変わらない賑やかな町である。

民は皆笑顔で、子どもたちは楽しく犬や猫らと遊んでいる。一見この長安は良い領主が良い政をしていると思うことができる。

しかし、それは外見上の話である。内の話になると全く別の話になる。

長安を治めているのは漢の皇帝である劉弁である。しかし、劉弁はあまり政に疎く長安の政を行っているのは実質「十常侍」である。この十常侍は、己の利益や私腹を肥やすいわゆる悪政治達である。

劉弁本人も、彼らのことを何とかしようと思っているが政を彼らに任せていれば長安は実質安泰なのである。

なので、劉弁や十常侍を良く思っていない善政治達は悩みの種をいつまでも抱えている状態である。

「はあ、何とかしないと朕らの国は乱世の国になってしまうかもしれない」

「しかし劉弁陛下、彼らを刺激すると陛下や劉協殿下に何かなされますぞ」

「その通りですじゃぞ陛下、彼奴らは平気で陛下や殿下に牙を剥きますぞい」

「爺までも・・・本当にどうすればよいのじゃ・・・」

劉弁陛下や彼の参謀長官や執事の爺までもが考えているなか、突然部屋がノックされた。

「劉弁陛下、慮植にございます！入ってもよろしいでしょうか？」

「慮植か？入ってまいれ」

「失礼します！」

入ってきたのは慮植と華雄、そして占師の格好をした女性であった。

「慮植さん。その者は？」と参謀長官が聞くと

「失礼いたしました。こちら、占いが全て当たると有名な管輅さんです。」

「……！管輅じゃと！？」

劉弁は管輅と呼ばれた女性を目を開いて見る。

慮植の紹介で管輅は劉弁陛下下の反応に驚きおどしている。

「大丈夫よ、管輅ちゃん。落ち着いて～落ち着いて～」

「は、はい」

慮植に肩を揉まれながら管輅は深呼吸をしている。

「すーはー……ふう、すみません慮植様。もう大丈夫です」

「そう（ニコ）」

落ち着いた管輅は劉弁陛下下に向って真剣な顔をして話をする。

「劉弁陛下、この度は突然の訪問お許しください。しかし、本日はとある予言を受けすぐに陛下にお教えしなければと思い、旧知の仲である慮植様に無理を言ってお願いを致しました」

「ふむ、なるほどのう……すまぬが管輅殿。そなたが真の管輅殿なのか証拠をお見せ願えぬか？」

「爺……いきなり何を無礼なことをいう」爺の発言に対し劉弁は怒鳴ろうとしたが

「陛下！申し訳ございませんか爺様殿の言つとおりかと、実は管輅と名乗つて陛下に近づこうとした輩が数人いたのです」と参謀長官が言つので劉弁は口をだすわけにもいかなかった。

「証拠ですか・・・ではここにいる皆さんにわたしの真名をお教えしようかと思っています」

「「「！！！？？？」」」

「それほど重要なことなのですよ陛下」

真名を教えますと突然言われたので3人はびつくりしたが、慮植の発言で3人はこの管輅は本物だと確信した。

「すまん管輅よ。朕はおぬしを信じるぞ。爺も長官もよろしいな？」

「はい陛下。私もこの方は信頼できるかたです」

「わしもそう思いますぞ、陛下」

「うむ。それと管輅よ、真名は教えなくても良いぞ、占師にとって真名はまことに大切なものと劉協より聞いておるでな。安心しろ」

「はい、ありがとうございます。では、話させていただきます。本日、わたしは夢の中で流れる星、つまり流星を見ました。その流星は、ここ長安より少し離れた荒野に落ち光り輝きました。輝きが収まると、流星が落ちた場所に一人の少年が立っていました。少年は光り輝く服を着ており、腰に剣とは似ているようで似ていない武器を挿しています」

「なんと、流星が落ち少年が立っているとな」

「はい。そして、その少年は4人の女性を従えています。しかし、4人の女性は人ならざる者です」

「人ならざる者？それは一体何者ですか？」

「はい。その4人の女性は精霊王という者たちでございます」

「「「「セイレイオウ？？」」」」

陛下、長官、慮植、華雄は聞いたことのない言葉に首をかしげる。
しかし、陛下の執事である爺だけが驚き隠せていなかった。

「精霊王じゃとー!!??」

「「爺（殿）知っているのか（ですか）??」」

「うむ、昔先々代の皇帝劉賢殿と旅をしていた時にの、とある峡谷に1つの祠があつての、わしと劉賢殿はその祠に何かしらの力を感じてのう。その時、たまたま祠から出てきた民がおったから聞いてみたのじゃするとの」

回想

『これは、精霊を祭る祠ですよ』

『セイレイとな？セイレイとは一体なんなのだ？』

『ええ、精霊とは精神の精という字と幽霊の霊という字の文字で精霊と言います。精霊とは、古代より存在する自然の霊もしくは魂みたいな存在です。例えば、火・水・風・土などの4つの理をもつ精霊がこの祠で祭られています。他にも様々な精霊がいますが、人間と一番接することができるのがこの4つの精霊です』

『へえ〜そうなんだ〜。所でその精霊っていうのは見ることが出来るの？』

『さあ、どうでしょう私たち村人は誰一人も見ることができません。しかし、昔には精霊王を従えた事があると文献に記されていますよ』

『「精霊王?」?』

『精霊王とは、それぞれの精霊の王のことです。例えば、火の精霊王、水の精霊王、風の精霊王、土の精霊王、という風に呼びます』

『へえ〜精霊王かあ・・・みてみたいなあ』

現在

「劉賢殿は、城に帰ってからもその精霊王について毎日のようにわしと酒を飲みながら話していたもんじゃ」

「なんとまあ。昔からそのような存在がいたのですか」
「不思議なものですな」

爺の昔話に皆関心をしていると

「で、管輅よその精霊王を4人も従えている少年は一体・・・」
「はい、その少年は天の御遣いとなる存在です。この後漢の時代は、後に乱世の世界になります。その乱世を、被害を最小限に抑えかつ、後に永遠の平和をもたらす者でございます」

「なんと!？」

「そのような者がこの世に舞い降りると!？」

「乱世の時代が来るのか・・・」

「ほほー、長生きしてみるものじゃなあ」

「爺様あ。のん気な事を言っても仕方がありませんよ」

皆それぞれ違う思いを考えていると

「して管輅よ、その天の御遣いはいつ現れる」

「はい。予言では次の無月、星が輝く時でございます」

「ということは、おおよそ一カ月後ですね」

「ふむ、ちと長いのお」

「はい。そして、この予言は全大陸に広まります」

「全大陸にじやと!？さすがに、一ヶ月以内は無理なのではないか?」

一ヶ月以内に予言を全大陸に広めるのはさすがに無理だろうと全員思うが

「大丈夫です。すでにわたしの導術で全大陸に広まるようにしました」

「あなたは、道術も扱えるのですか!？」

「すごいのお」

「一度手合わせ願いたいものです」

それぞれが違う事を考えていると

「長官、爺、慮植、華雄、そして管輅よ。この天の御遣いは朕に、そしてこの悩みの種をどうにかできるかもしれぬぞ」

劉弁陛下の突然の発言で5人は思った。

（（（（（天の御遣いを仲間にして十常侍を何とかしようとおもっているのか）））））

この後、劉弁たちは予言によって動くかもしれない諸侯たちまた、十常侍たちよりも早く天の御遣いを見つけるよう様々な意見を出しあう。

そして、管輅の予言は全大陸に広がり、王や諸侯たちは様々な反応している。民や商人や旅芸人らは、管輅の噂で毎日のように語っていた。

そして、一月が経ち慮植と華雄は天の御遣いが現れるであろう荒野を兵を連れて探していると、突然昼間にもかかわらず突然光が輝きだし、流星が2里先で落ちた。

落ちた方向に行くと一人の少年と4人の女性が見えたが、近づくと少年だけが立っていた。華雄が少年と話していると突然4人の女性が出てきた。

宿屋

「ということなの」

「はゝ、俺が天の御遣い・・・」

「一刀様が・・・」

「主様が・・・」

「当主様が・・・」

「一刀殿が・・・」

慮植から管輅の予言と話を聞いて一刀たちはどう反応すればいいか分からなかった。

「ところで慮植さん・・・」

「はい、なんですか？」

「話のなかで何回か聞いたのですが、真名とは？なんですか？」

「真名を知らないの？」

「御遣い殿の国では真名は存在しないのではないのですか？」

「ええ、まあ・・・」

「では、教えましょう。真名とは、その者にとって命と同等の名前のことです。真名は、家族や伴侶もしくは、信頼できる者にのみ教える名前です」

真名の大切さを聞き一刀たちは念話で初対面の相手を真名で呼ぶかもしれないから注意しようと決めた。

「それで、一刀くん。この地にあまり詳しくないと思いますのでよろしかったら我が主劉弁陛下に会ってもらえませんか？」

「まつ待ってください！慮植殿！いきなり皇帝陛下に会えて言われまして・・・」

「・・・別に良いのではないかしら」

「フリー？」

「どちらにしろ、私たちはこの世界について知らなければなりません。また、劉弁陛下は当主様に会いたいと言っているのです。この世界で最も偉い皇帝陛下に会っていれば後々よろしいかと思えます」

「ふむ・・フリーの言うとおりですね。一刀様、私はフリーの意見に賛成です」

「わたしも賛成です」

「・・・ドーリアはどう思う」

「はい、一刀殿。わたしも賛成でございます」

「うん。それじゃあ、慮植さん華雄さん、劉弁陛下にお会いになりますのでご案内よろしくお願いいたします」

一刀たちは劉弁陛下に会うことに決めた。

「ありがとうございます」

「それでは、一刀くん。馬に乗ってください」

「わかりました。所で、フィリアたちは姿をだしといった方が良いでしょうか？」

「そうですね・・どうしようか華雄」

「管輅さんの予言ですでに精霊についても話題になっているのでもう姿を隠さなくてもよろしいかと思います」

「そうね。ではフィリアさん、ウィリアさん、フリーさん、ドーリアさん姿はだしたままでお願いいたしますか？」

（どうしますか？一刀様）

（良いんじゃないかな。みんなも、姿を隠すの嫌でしょう？）

（はい、もう透明になるのは嫌です）

（わたしも、もう普通に過ごしたいです）

（わたくしも、隠れ身の姿は嫌いなので）

（うん、わかった。それじゃあ・・・）

「すみません慮植さん少し待ってください」

一刀が慮植に言うと空中に指を動かすと、精霊陣が浮かびあがった。いきなり、空中に変な模様がでてきたので慮植、華雄、兵たちが驚いた。

「御遣い殿。この模様みたいなものはいい・」

「これは、精霊陣って言うて精霊を細かく扱うのに使う陣です。普段は、詠唱などで十分なですけど、フィリアたちに少し制限をかけているのでそれを解除しようと思います」そう言うで一刀は真剣な顔をする。

「われ、北郷家第18代目当主北郷一刀が命ずる！今後、無闇に姿を表すことを許す！良いな！」

「はっ！はっ！はっ！我ら北郷様に使えし精霊。自らの名において、北郷様の命に従います！」

フィリア、ウイリア、フリー、ドーリアの4人は一刀の前で方膝をつけ主君に対する礼儀の姿勢をとり一刀の命を従うことを誓う。

その光景を見た慮植は（！？一刀さんはとてもすごい迫力を感じますねえ。これは・・・王の器というより神の器って感じがするわ）一刀の器に魅力を感じている慮植に対し華雄は（なんと素晴らしい忠誠心。私もこれぐらいの忠誠心を月様に見せなければ。それにしても、御遣い殿はとても強そうだ。おそらく恋よりはるかに強いだろう）

フィリアたちの忠誠心と自分自身武将なので一刀の武力を見抜きとてもかまわないと感じている。

そして、兵たちは天の御遣いと精霊王たちの主従の関係を見て畏れるものもいれば、彼女らのように忠誠心を、御遣い様のように強くなりたい、と思うものたちがたくさんいた。

一刀たちが誓いの儀を終えると、馬に乗り行きましょうと慮植に言う。

一刀たちが長安に向っているなか、管輅はこのことを導術で全大陸に「天の御遣い4人の精霊王を従えこの世に現る。」と噂を流した。

第3話：管輅の予言、皇帝の願い（後書き）

どうも、

朝から夕方までバイトだったので

少し遅い投稿になりました、

てなわけで、管輅の予言と@こと皇帝の話でした、

実は当初の予定と全く違っていたり・・・

これからも頑張ります（^^）

第4話：諸侯たちの思惑／その1（前書き）

一刀たちが長安に向かう中

管輅の導術によって天の御遣いと精霊王が

この大陸に降り立ったと全大陸に噂としていきわたり

おもたる諸侯たちがその噂を聞きどう思っているか・・・

第4話：諸侯たちの思惑／その1

陳留／曹操側

「華琳様あゝ」

城で猫耳フードを被っている軍師の荀？である桂花と一緒に仕事をしているところに、黒髪で長髪の夏侯惇こと春蘭がノックもせず勢いよく部屋に入ってきた。そのためか、また扉が壊れてしまった。

「ちよつと！また、扉を壊したわねえ！この脳内筋肉娘！！」

「誰が脳内筋肉娘か！ちよつと力強く開けただけで壊れるこの扉が悪い！！」

「はあゝ。春蘭、桂花。いい加減にしなさい」

「けど、華琳様あゝ。この馬鹿春蘭はこれで20個の扉を壊しているんですよ」

「違うぞ桂花。正確には19個だぞ！」

胸を張って春蘭は言うがあまりも場違いなことをいうので、陳留の領主である金髪で髪をクルクル髪にしている曹操こと華琳は溜息を吐く。（このおバカ・今夜はとことんいじめないと気がすまないのかしら）曹操が今夜の閨のことを考えていると一人の女性が入ってきた。

「失礼します華琳様。」

入ってきたのは夏侯惇の妹で水色の髪で後ろは首元まで伸ばしており、前髪は右目が隠れるまで伸ばしている夏侯淵こと秋蘭がやってきた。

「あら、秋蘭どうしたの？」

「はい。姉者がすっかりと華琳様に報告できているのが心配で来ました」

「そう。それで春蘭？　いつたい何の報せなの？」

まだ言い争っている夏侯惇と荀？の方に向き直って聞いてみると、夏侯惇は曹操の方に振り向いた。

「はい！華琳様！実はですね・・・え」と・・・その・・・

「はあゝ。忘れたわね？春蘭」曹操は眉をピクピクさせながら聞いた。

「姉者は可愛いな」夏侯淵は姉の姿を見て和んでいる。

「この際バカはほつといて秋蘭に聞きましょう華琳様」

「そうね。それで何の報せなの秋蘭？」

「はい。実は天の御遣いについて新たな情報を得ましたのでその報告に参りました」

「！！！？？」

夏侯淵が話していたのはここ陳留でも話題になっていた天の御遣いのことだった。管輅の導術によって、全大陸に一刀こと天の御遣いが流星に乗ってこの世に光臨したことがすでにいき渡っていた。

民が噂していたところに、夏侯惇と夏侯淵が通りかかり耳にして「すぐさま華琳様に報告しなければ！」と詳しいことを聞かずに夏侯惇が城に向って走り出した。姉の後姿を見ながら夏侯淵は民に天の御遣いのことについて詳しいことを聞きだした。

「それで秋蘭、その天の御遣いとやらはどんな男なの？」

「はい。噂では白く光る服を着ており腰に反りがある剣を腰に挿しており、4人の女性を従えて長安の近くの荒野に降り立ったそうです」

「ふうん・・・その4人の女性つてのは精霊？つてことでいいのかしら？」

「ああ。話に聞くとその4人はそれぞれ、赤・青・緑・茶色の髪をしており空に浮いたり姿を消したりする事ができるらしいぞ桂花」
「なんか胡散臭いわね。天の御遣いの男とか、精霊で人の姿をしている4人の女性とか・・・」

秋蘭の話聞いて桂花はその噂に疑問を感じているなか曹操が突然

「天の御遣いと精霊王ねえ・・・一度会ってみたいわ」と言った

「・・・！！！！？？？」

「華琳様何をおっしゃるのですか！」

「そうです！精霊とか胡散臭い存在に、天の御遣いについては男ですよ！！」

曹操は男嫌いでは有名な人物で女の子が大好きである。そんな彼女についている夏侯惇や荀？も大の男嫌いである。

「だまりなさい。私はこの天の御遣いがどのような人物なのか見定める必要があるの。私が霸王となるために必要な人物かね」

「なるほど。では、華琳様？この天の御遣いが現れた長安まで行かれますか？」

「その必要はないわ」

夏侯淵が曹操に聞くと行く必要がないと言われなぜですか？と聞くと「もし、その男が本物ならばこの大陸を見定めることになるわ。そうすれば、必ずここ陳留にも足を運ぶでしょう。その時にでも、天の御遣いと精霊とやらを見定めればいいわ」と3人を納得させる。

「・・・わかりました。この荀？。華琳様のためにもつと天の御遣

いと精霊について調べておきます」

「ええ。お願いするわ」

「わ、わたしも！華琳様のために・・・」

「あなたはどうせ文献なんか調べても理解しないでしょう（ー、ー）ニヤリ。あなたは街の警邏でもやってればいいのよ」

「な、なにを言うか！わたしだって頑張れば・・・」

「姉者。無理をするな」

「ううう。しゅうらん（Ｔ―Ｔ）ウルウル」妹の秋蘭に言われ泣き出す春蘭

「それじゃ、春蘭、秋蘭。今日は兵の調練でしょ？早く行かないと時間が無くなるわよ」

「はっ！ほら姉者、いつまでも泣いていないでさっさと行くぞ」

「うう。行ってきます、華琳様・・・」

「それと、桂花。この書類を季衣のところに持っていつてくれないかしら？」

「はい！華琳様！行つて参ります！！」

3人が部屋を出て1人になる曹操

「ふふ。天の御遣いね。早く会いたいわ。そして、必ず私の物にしてみせるわ！！」曹操は1人内なる想いを口走った。

長沙〱孫堅側〱

長沙の城で桃色の髪を肩まで伸ばし横一線に髪を整えている肌が褐色の孫堅こと天蓮は、旧知であるしら（シュツ）・・・銀髪で髪を団子にしている黄蓋こと祭と黒髪で腰まで伸ばしている軍師の周瑜である冥琳と部屋で談笑していた。

「祭？小蓮の教育は大丈夫？」

「大丈夫・・・と言いたいところですがのう堅殿。小蓮様は雪蓮様に
ついでかなりのお転婆むすめですぞ?」

「さすが私の娘って褒めたほうがいいのかしら?」

「逆ですよ天蓮様。それに雪蓮も仕事していると思ったらいつの間
にか逃げ出しているんですよ」

「・・・はあ。王位を継ぐものとしてあまり許されない行動ねえ。
ちよっとお灸をすえないといけないわねえ」

孫堅がそう言うのと笑いながら怒気のオーラを纏いだした。

（まずい! 堅殿が怒りだした。冥琳よ、なんとかできんか?）

（無理ですよ。いつその事怒られればいいんですよ）

と黄蓋と周瑜小声で話していると「母様! いる?」と部屋に入っ
てくると同時に叫ぶ女性雪蓮と言われていた人物、孫策である。孫堅
に良く似ており違うのは髪を周瑜同じ腰まで伸ばしているところ
である

「雪蓮・・・部屋をたたいてから入ることすらできないの?」

「ちよっと冥琳。いきなり小言を言いだすのはやめてちょうだい。

せつかくおもしろい情報を持って来たっていうのに」

「へえ」。それで我が娘雪蓮は仕事をほったらかしにしてどんな情
報を持ってきたのかしらねえ・・・内容次第では・・・分かつ
ているわよねフッフ（+ー）キラーン」と悪魔の微笑みを雪
蓮に向ける

「うつ・・・だ、大丈夫よ。それでね、私が持ってきた情報ってのは
ちよっと前に話題になった天の御遣いと精霊についてよ」

「・・・!!!!!!」

「へえ」。あの噂がまた流れているのねえ。それで、内容は?」

「うん。その天の御遣いの少年は管輅の予言どおり光り輝く衣を着
ていて、腰に反りのある剣を腰に挿していて、4人の女性を従えて
いるらしいわよ母様」

「ふむ。その4人の女性とはおそらく精霊王という者たちだな。」
「ほほ。精霊が人の姿をしているのか。思っていたのと違うのう。もつとこう、隆々しい化物を想像していたぞわしは」

雪蓮の話で冥琳は天の御遣いと精霊王についてあらかじめ調べいたので4人の女性が精霊だと判断をした。そして、祭は思っていたのと違ったので少しガッカリしている。

「ふん。天の御遣いねえ・・・一度この目で見てみたいわねえ」
「しかし、天蓮様。少し危険ではありませんか？この噂の人物たち、われらにとつて無害なら良いが、もしわれらにとつて有害なじんぶつたちだったら・・・」と冥琳が孫堅に話していると
「ねえ。みんな！！わたしとても良い事を思い浮かんだのだけど」
「却下だ」

孫策が名案があると言うが孫堅と周瑜はすぐさまに断りをいれた。

「ちょっと話を聞いてもいいんじゃないかしらブーブー」
「どうせお前のことがくだらんことでも思いついたのだろう」
「そうだ。そんなことを考えているより溜まっている書簡を片付けてくれ」

「ええ、名案だつてば。その天の御遣いの血を私たち孫一族にいられたらつてはなしなんだけど」

「・・・はあ！？」

「ハハハ。雪蓮様は本当におもしろい事を思いつきますなあ」

孫策の突然の思いつきで孫堅と周瑜は驚き黄蓋は笑っている。

「ちょ、ちょっとまでこのアホ娘。それはつまり、お前が蓮華か小蓮を天の御遣いというこの馬の骨かわからない男と結婚するって

「何か!？」

「ええそうよ母様。天の国の血が私たち孫一族にまじれば孫呉は永遠と安泰だと思うの。どう? いい考えでしょう」

孫策は胸を張ってどう?と威張っているが孫堅と周瑜は頭を抱えてとても深い溜息をついている。そして、黄蓋はその話を聞きそれならばわしも天の血をもらおうかのうと孫策と意気投合している。

（はぁ・・・天蓮様。どういたします?）

（どちらにしろ、天の御遣いには一度会ってみないといけないわね）と孫堅と周瑜は小声で話し、孫堅は天の御遣いについてどんな人物なのか色々考えはじめた。

とある町の宿屋（劉備側）

「愛紗ちゃん! 鈴々ちゃん! 朱里ちゃん! 雛里ちゃん! 聞いて聞いて〜」

濃いピンク色の髪で背中まで伸ばしているのは桃香こと劉備である。自分たちが泊まっている部屋に勢いよく入ると中に1人の女性と3人の女の子がいた。

「どうなされましたか? 桃香様」第一に声をだしたのはとても美しい黒髪の女性、愛紗こと関羽である。

「どうしたのだ? 桃香お姉ちゃん」次に声をかけたのはショートボブの赤い髪の女の子、鈴々こと張飛である。

「〜どうかしましたか? 桃香様」2人同時にしゃべったのは、1人はショートボブで薄茶色の髪で帽子を被っている女の子、朱里こと諸葛亮である。そして、最後は青と銀が混じったような色の髪で長い髪を後ろで纏め少し髪を垂れ流している女の子、雛里こと鳳統

である。

「あ、皆いたんだ！よかった。実はね、町で天の御遣いについての情報を手に入れたんだあ。えへへ」

「本当ですか！桃香様」

「すごいのだあ。お姉ちゃん」

「はわわ、天の御遣いの情報ですか！？」

「あわわ、すごいですう」

劉備が褒めて褒めて〜というような笑顔をしているなか2人は劉備を褒め2人の軍師は驚いていつもの口癖がでていた。

「桃香様。それで、天の御遣いの情報とは一体？」

「あゝそうだった！あのね、町の人が言っていたのだけど・・天の御遣いである少年と4人の女性を従えて長安の近くの荒野に流星に乗って現れたんだって」

「なんと！？それは本当ですか？」

「流星に乗ってきたのか？すごいのだあ！」

「雛里ちゃん。天の御遣いだって！」

「うん、朱里ちゃん。それに4人の女性はおそらく精霊王さんたちのことだね」

関羽と張飛がそれぞれ違う意味で驚いているなか、諸葛亮と鳳統は天の御遣いと精霊王について話し合っていた。

すると、劉備が突然「ねえねえ皆。この天の御遣いさんと精霊さんたちを私たちの仲間にできないかなあ」と言いだした。

「天の御遣いと精霊王たちをですか！？桃香様さすがに無理ではないでしょうか？」

「おお？無理なのか？愛紗？」

「愛紗さんの言うとおりですね。天の御遣いと精霊さんたちは、こ

の大陸でこれから起こる乱世を治めるためにきたのです。だよね雛里ちゃん」

「うん、そうだよ朱里ちゃん。それに、おそらく天の御遣いさんと精霊王さんたちはこの大陸を見回る可能性がとても高いです。」

「そっかあゝ。でもでも、どこかで待ち伏せして会うことはできるよね？」

劉備は関羽、諸葛亮、鳳統に仲間にするのは難しいと言われたが一目でいいから会ってみたいと目をキラキラ光らせながら皆を見ている。

「はあ・・・わかりました。桃香様の願いならば、この愛紗義姉の願いを叶えてみせましょう！」

「おお！？ならば鈴々もお姉ちゃんの義妹なのだから、愛紗と一緒に叶えてみせるのだあー！」

「はい。わたしも、天の御遣いが行きそうな場所を調べてみまじゅでしゅ、はわわ、かんじやった・・・」

「わたしも、精霊王さんたちについてもっと調べておきまじゅ、あわわ、朱里ちゃんゝわたしもかんじやったよ」

4人は主である桃香に天の御遣いと精霊たちを会わせると誓いを交わした。

（天の御遣いさんかあ。かつこいいのかあー！！きやあゝ／＼）と劉備自身は天の御遣いがどんな少年なのか脳内をピンク色で考えている。

第4話：諸侯たちの思惑（その1）（後書き）

いや〜

遅くなりました〜

朝から大学にいつて

レポートと闘っていました・・・

でなわけで諸侯たちの思惑その1です

本当は1つに纏める予定だったのですが

さすがに時間がないので

魏・呉・蜀の面たるメンバーを

とりあえず投稿いたしました〜

また、誤字脱字があるかもしれませんが

ご指南のほうよろしくお願いいたします！

ではでは、次話はその2をお送りしたいと思います！！

追伸

明日から3連休だあ（><）

だけど・・・3連休は朝から晩までずっとバイト・・・

なので、この3連休は投稿できないかもしれません。（――）

○ ショボーン

ですが、可能な限り執筆をし

投稿しようと思っています

もし、投稿できていなかったら・・・

「バイト頑張ったんだねお疲れ様」

と言っていただけなら

嬉しい所存です！

第5話：諸侯たちの思惑／その2（前書き）

諸侯たちの思惑

その2です！

第5話：諸侯たちの思惑／その2

洛陽／董卓側／

洛陽の城の一室で、2人の少女が政務を行っている。

「詠ちゃん。この書類なんだけど・・・」詠と呼ばれた少女は緑色の髪を伸ばし途中から三つ編みをしているのは軍師の賈馮である。

「何？月？」月と呼ばれた少女は薄青紫色の髪を肩まで伸ばしウエーブがかかっているのはここ洛陽の領主である董卓である。

「ああ／またあの貴族の謁見か・・・。どうせまた下らない自慢話ばかりするんでしょう。却下よ！却下！！」

「でも詠ちゃん。この人は・・・」

と2人は政務をがんばっているところに2人の女性が入ってきた。

「詠っち、月っち。今大丈夫か？」

最初に声をかけたのは、紫色の髪で後ろ髪を纏めているのが霞こと張遼である。

「月・・・詠・・・調練が終わったよ」

最後に声をかけたのが、ショートボブの赤色の髪で頭から3本の髪の毛がたっているのが恋こと呂布である。

「あら、あんた達もう調練が終わったの？」

「せやで。せやから、溜まっていた仕事を恋と一緒に持ってきたんや」

「・・・お腹すいた」

「ちよつと恋？さっき肉まん20個食べとったやんか」

「れ、恋ちゃん。そんなに食べたなら晩御飯食べられなくなっちゃうよ?」

「そうよ恋」

仕事終わりの張遼と呂布と一緒に話をしていると「恋殿?恋殿どこにおられるのですか?」と女の子の声が廊下から聞こえてきた。

「・・・ねね・・・」

「おお恋殿!ここに居られましたですか」入ってきたのは明るい緑色の髪で後ろ髪を二つに束ねている女の子は、音々音こと陳宮である。

「ちょっとねね。もうちょっと静かにできないの?」

「おお?月殿に詠殿に霞殿。ここで何をしているのですか?」

「なにをつて。ここは月つちと詠つちの仕事部屋やん。」

「ふふふ。ねねちゃんはいいかわらずだね」

「月。ハア・・・それでねね?あなた恋に何かようがあるんじゃないの?」

「そうなのです!恋殿、夜菜殿に預けていたトリイが帰ってきたのですよ」

「「「!?!?!?」」」

夜菜とは華雄の真名である

トリイというのは、恋の家族の鳥のことである。トリイは伝書鳩ならぬ伝書鳥である。

「ちょっとねね!!--それを早く言いなさいよ!恋!早くトリイを呼んでちょうだい」

「・・・うん。わかった」

賈馱に言われ呂布は口笛を吹く。すると、恋の家族である動物たちが一斉にやってきた。

「わんわん」「にゃーにゃー」「ぶーぶー」「もー」

「きゃあああああー!!」

「へう〜」

「ちよ、これはしゃれにならんでえ〜」

「恋殿〜」

「・・・トリイ・・・おいで」

みんな、動物に囲まれ目を回しているなか呂布はトリイを呼び頭の上に乗せた。そのトリイの足に手紙がくくられている。

「恋!! はやくこの動物たちを部屋からだして!!」

「・・・うん」

「え、詠ちゃ〜ん」

「あ、アカン。これはアカンわ」

「きゅ〜」

恋は家族を外に出し、トリイの足にくくりつけている手紙を外し賈馱に渡す。

「ふう〜・・・それで？夜菜っちはなんて？」

「はいはい、今読むから・・・なにに？『無事天の御遣いと精霊王と接触。このまま劉弁陛下の下にお連れいたす。』だって・・・つて天の御遣いと精霊王!？」

「おお、そういえばちよつとまえにそんな噂流れとつたなあ」

「それってたしか、天の御遣いである少年とその彼に従う4人の精

霊王のこと？」

「そうそう！たしかそんなかんじの噂やったでえ」

「あのような噂が現実になるなんて思ってもいなかったのです」

「zzzz」

「恋さん、机の上に頭をのせて寝ないでくださいい」

「ちよつと恋！月が困っているじゃない！！」

「恋殿！寝る前にご飯を食べに行くです」

「・・・ん・・・ご飯たべる」

陳宮は起きた呂布と一緒に部屋から出ていく。

「にやはは。ホンマにねねは恋のことがすきやなあ」

「笑っている場合じゃないわよ！それに手紙には続きがあるわよ」

笑っている張遼に賈馱はちよつとだけ苛立ちながら手紙の続きを読む。

「えーと『この天の御遣いは、これまでに見たことのない王の器を持つている。また、彼に従う4人の精霊王も主に対する忠実心が最高である』と・・・なるほど、夜菜が言うからにはそれなりの実力者の持ち主ってことね」

「へーあの夜菜がなあ・・・一度でいいから手合わせ願いたいわあ」

「ちよつと霞さん。ダメですよ」

「そうよ。それに、もしかしたら彼らに私たちが今行っていることに手伝ってもらうかもしれないのだから」

「！？そうなんか？それやったらその時まで待つとくわあ」

賈馱にそう言われ張遼はかなりご機嫌になり口笛を吹きながら部屋から出ていった。

「詠ちゃん、本当にてつだってくれるかなあ？」

「大丈夫よ月。噂は乱世を治めるって言っているのでしょうか？これってつまり、邪悪なる者や存在を許さない者ってことでもあるの。それに、この大陸に来たばっかだから右も左もわからない状況だと思っの。その時に貸しを1つでも作っていれば後々困ったときに助けてくれるかもしれないしね」

「うん・うん！そうだね。劉弁陛下たちを助けるためにはこの人たちにも手伝ってもらえたら被害も少ないもんね」

董卓と賈馱はそれから、とある作戦について数刻話し合う。

その後、呂布とその家族がご飯を全部食べて呂布に説教したのはまた別の話。

西涼〱馬騰側〱

「こら〱蒲公英！！しっかりしろ！！」

「いったい！！翠姉さま。そんなに力いっぱい頭叩かなくともいいじゃん」

2人の少女が訓練である仕合を行っている。

1人は叩かれた頭をおさえている少女は、茶髪で片側の髪を結んでいるのは蒲公英こと馬岱である。

もう1人は馬岱と同じ髪の色をしており、違っの馬岱より髪が長くその髪をポニーテールにしているのは翠こと馬超である。

「お前が、本気で仕合をしないからだろうが！」

「だつてえ〱、翠姉さま馬鹿力だからたんぽぽけがしちゃうもの〱」

「おまえなあ〱！！」

「いい加減にしなさい！！2人とも！」

馬超と馬岱が言い合っているところに1人の女性が怒鳴りながらやって来た。

彼女は、馬超によく似ており濃い茶色の髪で腰まで伸ばしているのは楓こと馬騰である。外見上とても1児の母には見えない。

「母様！蒲公英が私との仕合でしつかりしないから・・・」

「ちがうよ伯母様。わたしは・・・」

「だまりなさい！！！」

「はい！！！」

「まったくもう！！いいですか？まずは・・・翠！いくら蒲公英ちゃんが生剣に仕合をしていないからって叩く必要はないわ！そして蒲公英ちゃん！あなたはたしかにそれなりに強いけど、それでも翠と仕合だからって手加減してはいけません。2人とも、わかった？」

「はい！！わかりました！！！」

馬騰に説教されるとイヤでも過去の罰を思い出すので2人とも素直に馬騰の言うことを聞いている。

説教が終わると馬騰はいつもの優しい笑顔に戻る。

「そう。わかればいいのよ。それじゃ、お茶にしましょうか。」

馬騰は侍女たちにお茶の用意をさせ馬超と馬岱の3人でお茶を楽しむ。

「そつえば、伯母様。たんぼぼねえ、町でおもしろい話を聞いたの」

「おもしろい話？なにかしら」

「どうせ、この前みたいなたの御遣いとかいう変な噂話だろ？そんなもん嘘っぱちだって」

「ぶーぶー、翠姉さまひどい！けど、話の内容はそのたの御遣いに

ついてだよ！」

「あら、その話ならわたしも侍女たちから聞いたわ」

「母様まで！？一体どんな話なんだ？」

「えー？どうしようかなあ？さっき全然聞こうとしなかったじゃない」

「う、うるせえな！いいじゃねえか」

「こら翠。今のはあなたが悪いわ」

「うっ・・・」

「プププー。そうだそうだ、翠姉さまが悪い」

「っ！この！！」

「翠！たんぼちゃんもいい加減にしなさい」

「わ、わかったよ」

「はい、ごめんなさい」

「いいわ、私が話してあげる。さっきも言ったけど侍女たちから聞いたのだけど、天の御遣いである少年は腰に反りのある剣を挿し、4人の精霊王を従えていて、都の長安付近に流星と共に舞い降りたと聞いたわ」

「セイレイ？なんだそのセイレイってのは？」

「ええ！？翠姉さま知らないの！？1月前に話題になった精霊だよ？」

「だっから、そのセイレイってのは何なのだよ！？」

馬岱が驚いているなか馬超は焦らされたと思ったのか、母親にセイレイって何？という聞きたそうな顔を見せる。

そんな娘の顔をみて馬騰は微笑みながら答える。

「精霊っていうのは、精神の精という字と幽霊の霊という字の文字で精霊っていうの。精霊とは、古代より存在する自然の霊もしくは魂みたいな存在で、例えば火・水・風・土などの4つの理をもつ精霊がいて、他にも色々な精霊がいるらしいのだけど、人間と一番接

することができるのがこの4つの精霊なのだそうよ」

「ほえ、伯母様よく知っているねえ」

「ふふ、全部噂が好きな侍女の子から教えてくれたのだけどね」

「????つまり・・・その精霊ってやつらはとても強いってことだな？なんだって「王」って言われるぐらいなのだからな」

今の話を聞いて馬超は自分なりに考え、考えた結果今の答えがでてきた。

「はあ、翠？あなたは、もうすこし頭の方の勉強をなさい！」

「な、今のでなんでそんなことになるんだよ？」

「わはははは。翠姉さまは、もうちょっと賢くならないといけな
いんだ」

「た、たんぽぽ！？おまえなあ」

「おっと、コワイコワイ。それでね伯母様。その話でね、天の御遣いについて知っている？」

「いいえ。何も知らないわ。たんぽぽちゃん、なにか知っているの？」

馬超の拳骨から逃れた馬岱は、馬騰に天の御遣いについて何も知らないことを確認し、胸を張って話し始めた。

「その天の御遣いである少年ってね噂では翠姉さまと同じぐらいの年で白く輝く服を着ていて、とっててもかっこいいんだって」

「へえ、そうなの」

馬騰は少し会ってみたいなあと思っているなか「そんなわけないだろう」と馬超が言いだした。

「そんな、見たこともない男なんかかっこいいかどうかからねえ

だろ！それに、だいたいそういうやつらって信用できないんだよ」
「ああ、翠姉さま、たんぽぽの話信じてないんだ。」

2人がまた言い争い始めたので、馬騰はさすがになにか罰を与えないといけないわねえと思いながら2人の言い争いを悪魔の笑みをしながら見ている。

幽州啄郡、公孫賛側、

「白蓮殿。天の御遣いについてまた、新しい情報を手に入れましたぞ。」

声をかけたのは、ショートボブで青緑色の髪をしている女性は、星こと趙雲である。

「うん？おお星！どうした？」

星の呼びかけに振り返ったのは、赤色の髪で後ろ髪を纏めて、両サイドの髪を伸ばしている女性は、白蓮こと公孫賛である。

「どうした？星」

「じつはですね。町でおいしいメンマラーメンを食べた帰りにおもしろい話を聞きましたね。その報告をと」

「ほうほう。でえその話つてのはなんだ？」

「あい。話というのは、少し前に話題になった天の御遣いと精霊王とかいう噂についてなんです。なんでも、その天の御遣いたちがこの大陸に天から流星に乗って現れたとか」

「へえ、そうなのかあ。」

「あれ？白蓮殿、あまり驚きませぬなあ」

「その話なら、桃香から手紙で知ったからな」

「ああ。たしかあ、同じ師範の友の方でしたかな？」

「ああそうだ。その手紙で知ってたな」

「なるほど、そうであつたかあ」

趙雲は耳にした話を公孫賛が既に知っていたことをすると、部屋から出ようとする。

「ちょっと待て星」

「うむ？なんですか？」

「お前、この前から頼んでいた書類なんだが・・・」

「さて、わたしは少し用事を思い出したのでこれにて失礼」

趙雲は風の如く・・・・・・逃げた・・・

「くらくく！！星くくくく！！！！」

その日、幽州啄郡で公孫賛の叫び声が半日中響き続いたという・・・

河北く袁紹側く

「オーホツホツホッホ！！！！猪々子さん！斗詩さん！」

「はい？」

高笑いをしているのは、金髪で髪が長くクルクル髪をしている女性
は、麗羽こと袁紹である。

そしてその袁紹に真名を呼ばれた女性2人。1人は明るい緑色でシ
ョートボブの髪型でハチマキをしている女性は、猪々子こと文醜。
そして黒髪で肩まで伸ばし、前髪を横一線で整えている女性は、斗
詩こと顔良である。

「なんですか？姫」

「あたいたちに何かようですか？姫」

「ええ。なんだか最近、この天の御遣いとかいうわけのわからない話が話題になっているのはお2人とも知っているわね？」

「ええ、有名な話ですよ」

「そうなのか？斗詩」

天の御遣いの話で顔良は詳しく知っているが文醜は全然わかっていないみたいである。

「そうなのですわ。そこで！！お2人には、この話よりわたくしがとても優雅でとても優秀でとても可憐でとても美しい領主であることを、全ての民に分からせるの！！」

「「ええええ」」

「そして、天の御遣いという馬の骨のブ男さんの話を木端微塵にきれいになくしてみせますわ！！オーホッホッホッホッ！！」

袁紹がアホなことを言い始めた。

（斗詩？）（何？文ちゃん）

（姫は一体どうしたんだ？風邪でも引いたのかな？）（・・・はあ）

（ちょ、斗詩）なんでタメ息なんかつくんだよ）（あのね、文ちゃん。姫は、天の御遣いさんっていう今話題になっている人が姫より有名になっているから悔しくてたまらないんだよ）

そう、袁紹は天の御遣いである一刀を妬んでいる。そんなことも知らない一刀は、長安で一休みをしている。

「猪々子さん！斗詩さん！聞いていますの！！」

「「はいはい！！」」

姫こと袁紹の相手をする2人は今話題になっていることを横に置き、今は目の前のことを何とかしようと決めた。

荊州へ袁術側へ

部屋に金髪でクルクル髪の女の子がいた。その女の子こそ、美羽である袁術である。

「七乃へ？七乃はどこじゃあへ？」

「はいはい美羽様へ？お呼びですかへ？」

袁術に呼ばれた少女は、紺色の髪でショートボブの少女は、七乃へと張勳である。

「七乃へ妾は蜂蜜水が飲みたいぞへ」

「はい美羽様！今すぐお持ちいたしますね」

その後、2人は天の御遣いの話をする事はなかった。

第5話：諸侯たちの思惑その2（後書き）

どうも

お待たせしました（^^）

体中が悲鳴をあげている中

大学にいつてから執筆しました！！

いやゝがんばりましたよ

諸侯たちの思惑その2

これで一通りのキャラクターを出せました

次話は一刀たちがついに皇帝に会う話です！！

また、新キャラクターも出す予定です（><）

では、次の投稿をお待ちください！

追伸

誤字脱字変な文章があったらご指南願います！！

第6話：一刀、皇帝に会う（前書き）

一刀たちはついに漢の都

長安に到着

そして、皇帝謁見する

第6話：一刀、皇帝に会う

慮植たちから、馬を借りて長安に向っている一刀たち。馬を巧みに操る一刀を見て慮植と華雄は感心していた。

「ほお。北郷殿は随分馬に慣れていらつしやるな」長安に向っている途中で、一刀は自分のことを御遣い殿と言う華雄に名前で言ってくれと頼むと「では、これからは北郷殿と呼ばせていただきます」と決めた

「そうねえ。一刀君のいる天の国では馬に乗れるのは容易い事なのかしら？」

「いえ、そういうわけではないですよ慮植様。私たちの世界では、馬に乗ることはあまりないのですよ」

「そうなんです。しかし、当主様はなぜか昔から馬に乗れていたと母君から伺っています」

慮植の疑問にフィリアとフリーリが答える。

「あら？そうなの、一刀くん？」

「ええ。日本には馬がいますが、こんなにたくさんの馬が1箇所にあることはまずありません」

「へえ。ねえねえ一刀くん！もつと天の国のこと教えて！」

「うーん・・・何から話せばいいのか・・・」

「なんでもーいいと思いますよー主様」

「そうですね。一刀殿や我々の常識がこちらの世界ではタブーである可能性があるかも知れません。少なからず、こちらの常識を知っていたほうが良いかと思います」

前を見ると慮植が微笑んでいる。

「御遣い様、精霊王様がた！長安へようこそ！！」

慮植はとても楽しそうに一刀たちを歓迎した。

長安の町をまっすぐ進み城へと入っていき、侍女に部屋へ案内され「お呼びになられるまでこの部屋でおくつろぎくださいませ」と言い出ていった。

その時、一刀の顔を見て目が合うと顔を赤くしながら出ていった。

「あの娘、なんで顔が赤くなっただろう？」

「当主様？本気でわからないのですか？」

「まあ主様だからね」

「え？え？な、なんでそんな目で見るの？」

「ふう・・・一刀様はもう少し女性の心を分かるべきです！」

「そうですよ一刀殿！もっと女性のことを考えるべきです！」

なぜか、フィリアとドーリアが説教を始めたので一刀は話題を変えようとした。

「そ、そんなことよりもこの町にはいつて歩いていたら、町の人たちは俺たちのことをジーンツと見てたよな」

「・・・逃げましたね？一刀様（殿）」

「・・・ソナコトアリマセンヨ」

「でも主様の言うとおりにみんなウィリアたちのこと見てましたね」

「たしかに、おそらく私たちがこの大陸に着いたことを管輅さんが流したんでしょう」

「な！な！そうだよな！いやウィリアとフリーはよく見ているな

」

一刀はフィリアとドーリアから離れ、ウィリアとフリーの頭を撫でる。それを見たフィリアとドーリアはお互い（しまった）と思った

「にゃゝ主様ゝウィリアはもつと撫でて欲しいのですゝ」

「と、当主様。で、できればわたしももつと撫でて欲しい・・・です／＼／＼」

ウィリアは目を細めて猫の様に和み、フリーは顔を真っ赤にしながら一刀の手をもつと撫でてと上目遣いで見ている。

「ゝゝゝああゝウィリアとフリーは可愛いなあゝゝ」一刀は2人の可愛い顔を見て我慢ができなくなりウィリアとフリーを抱きしめる。その時、フリーは（／＼／＼／＼／＼）な顔をしてうつむいていたがウィリアはフィリアとドーリアを見て（「！」）ニヤリと笑った。

「ゝゝゝゝゝゝ一刀様（殿）！！わ、わたしにも」

とうとう我慢できなかったフィリアとドーリアはわたしも頭を撫でて欲しいと言おうとしたが「失礼しますねゝ」と鎧を脱いだ慮植が入ってきて言えなかった。2人は膝をつき落胆してしまった。

「あら？あらあら？フィリアとドーリアはどうして落ち込んでいるの？」

「ゝゝゝ何でもありません慮植様（殿）（；A、）トホホ」と嘆いている。

「まあまあゝ慮植さんゝ。あまり話しかけないでやってくださいゝ」

「そ、そうですね。」

ウィリアはとても満足な顔をしておりフリーはまだ顔が赤かった。
一刀はフィリアとドーリアを後で撫でてあげようと心に誓った。

「??まあいつか。一刀くんみなさん。劉弁陛下がお会いになります。付いてきて下さい」

慮植についていくと大きい離れのところに案内された。すると「陛下。慮植にございます。天の御遣いと精霊王さんがたをお連れしました」と慮植が扉の前で大きな声をだす。

「うむ。入ってまいれ」と男の声が聞こえた。

「失礼いたします」

慮植が入っていき一刀たちも部屋に入ると3人の男がいた。

1人目は入って右に座っている短髪の黒髪で片眼鏡を掛けている男性。2人目は入って左に座っている白髪で髪をまとめておりあご髭を伸ばしている老人。最後は入って真ん中に座っている茶髪で髪を後ろで纏め他の2人より豪華な服を着ている青年。

「ご苦労様です。慮植殿」

「いえいえ、長官様も爺様も何事もなくてよかったです」

「おいおい、それはどういう意味かのお？」

慮植が男性と老人としゃべっていると

「其方がてんのみつかいなのか？」真ん中に座っていた青年が一刀に問いかける。

「俺が天の御遣いかどうか分かりませんが、俺はたしかにこの世界

とは別の世界から来た者です」

「・・・フム。しかし、其方はそこにおる4人の精霊王を従えてい
るのではないのか？」

「たしかに、彼女らは俺に従っています」

「それじゃあ、其方が天の御遣いできまりじゃな」

あつさりと一刀が天の御遣いであると決めるのでさすがに一刀も戸
惑った。

「あ、あの～陛下？さすがに素性も知らない俺もそんな簡単に決め
付けてもいいのですか？」

「よいよい。朕がそう決めたのじゃ。それに、天の御遣いに関する
話は全大陸に伝わっておる。其方の格好や4人の不思議なお供を見
ればだれかて天の御遣いだと見抜くぞい」

劉弁陛下は楽しそうに、まるで旧友であるかのように一刀に話しか
ける。

「そういえば、まだ名を名乗っておらなかったの。朕は、姓が劉、
名が弁、字が公禪じゃ」

「俺は、北郷一刀。姓が北郷で名が一刀。字と真名はないので好き
なように呼んで下さい」

「ほお。では一刀と呼ばせてもらうぞい！それでな一刀、朕は其方
に真名を預けたいと思っっているのじゃが・・・」

「え・・・真名つてとても大切なものなんじゃ・・・」

「よい。朕は其方を心から信頼できると思った。じゃから真名を預
けたい。これが理由じゃがだめか？」

「わかった！」

「フム！では教えよう。朕の真名は暖羅じゃ」

「暖羅・・・わかりました。それじゃ改めて・・・俺の名前の一刀が

真名みたいなものだから一刀を暖羅に預けます！」

「うむ！それでな一刀、其方敬語があまり慣れてないのじゃろう？
普段のように喋ってもかまわんぞ」

「う・・わ、わかった。これでいいか？」

「うむ。それと、慮植から聞いていると思うが他人の真名をあまり
言うでないぞ？」

「ああ。それなら大丈夫。ちゃんと慮植から教えてもらったから」

暖羅と話していると一刀も肩の荷が軽くなったのか、一刀もまた旧
友と話すような感覚になった。

第6話：一刀、皇帝に会う（後書き）

ちよつと短いですが・・

一刀と陛下の出会いでした

ちよつと文章がへたくそかなあゝ

と思っています（；´д、） トホホ

次話は陛下が一刀にある作戦の話をしします

そして一刀はある人物と運命の出会いを・・

第7話：一刀、運命の人に会う（前書き）

劉弁こと暖羅に会い

2人の女性に出会う

その中に、一刀は運命の人に出会う

第7話：一刀、運命の人に会う

劉弁から真名を受け取った一刀はこの世界はどのような状態なのか長官と執事の爺から聞いている

「・・・ということなので」

「つまり、暖羅たちは十常侍のやつらをどうにかして平和な漢の時代を取り戻したいと・・・」

「そういうことじゃ、御遣いよ。そして、その為には天の御遣いという其方が必要なのじゃ」

「その通りじゃ。一刀という天の御遣いという存在は今では全ての民の救世主・悪を滅ぼす正義の味方、となっておるのじゃ」

「そうです。その救世主となっている一刀くんがフィリアちゃんたちを連れて十常侍を倒そうとする。すると、民たちは十常侍が悪の存在だと考える。そうすれば、民は一刀くんの味方になるわ」

劉弁たちは、十常侍という表ではいい政をやっているが実際は自分たちの利益や欲の為にやりたい放題をしている。そんな彼らを劉弁たちは何とかしようと考えていた。そんな時に管輅が現れ天の御遣い、つまり俺のことを伝え俺がこの乱世を治める。それを聞き、俺にも手伝ってもらおうと暖羅が言いだし、どこよりもはやく俺をここ長安に連れてくることにした。

ここまで、話を聞いていた一刀たち。最初に口を開いたのはフィリアだった。

「その、十常侍とかいうやつらはどのような人なのですか？」

「『十』ということなので、10人の宦官です」

「宦官？フリー、宦官って何？」

「えーと、宦官って言うのは、官僚のことで生涯国に使える人たち

ですね。」

「そして、その人たちは、下がらないの。」

「？ウィリアはどういうこと？」

「つまり、男性の性器がないってこと。」

「……（o） え？」

「それってつまり……」

「オカマってことか？ウィリア」

「……？」

「ドーリアちゃん。そのオカマって何？」

「はい。オカマとは性別が逆になっていることです。例えば、体は男でも心や考え方が女である人たちのことを言います」

「ああなるほどね」

「？一刀どうしたのじゃ」

「い……いや、だだだだだいじょびだ……」

オカマと聞いてから一刀は震えだした。

実は、一刀はある任務の最中同行していた警察の中にオカマがいて襲われそうになった。

その時は、4人の精霊の力を使って何とか事なきを得たが、その後も一刀は女性だけではなくオカマにも目を付けられる事が増えていった。

まだ震えている一刀を後ろからそっと抱きしめた人がいた。

「大丈夫ですよ一刀様（^・^） ニコッ」

「フィリア……」

「一刀様をあんな変態どもを近付けさせません!!」

「（T-T） ウルウル、フィリアあ……」（ガシ）

一刀はフィリアの腰に抱きつき安心している。

そのフィリアは一刀の頭を撫でている、その顔は恍惚としている。

「ああゝ一刀様／＼／＼もう二度と一刀様にあのような変態どもを
ちかつかせません!!」

「ちょ、フィリア！なにドリップしているのだ!!うらやましいぞ
!!!」

普段冷静で丁寧なフィリアが久しぶりに暴走しかけていたのでドー
リアが止めようとしている。

「ドーリアちゃん？本音が出ているわよ」

「ハッ!!!し、失礼いたしました／＼／」

本来の姿をみせた一刀と精霊たちをみて、暖羅や長官、爺、慮植ら
は（彼らもわれらとおなじ人なのだな）と全員思った。

「それですね、北郷さん。私たちの作戦に手伝ってくれませんか
？」と長官が尋ねる。

すると、一刀はフィリアに抱きつきながら顔を長官にむけてしゃべ
る。

「ええ、いいですよ」

「それでは、作戦は明日の朝に行います」

「そんな急に行うのですか？」

「んゝさすがにゝ無理なのではゝ？」

「いやあゝ長官君が正しいと思うのお。十常侍のやつらもそなたら
が長安に入城していることはとうに知れておるだろう。それならば、
明日にでも動かなければならない」

「本当は、今すぐにでも動きたいのですけど、なにぶん一刀くんた
ちが来なくても明日には本当に作戦を執行していたの」

「そうなのじゃ、なので一刀よ。すまんが、其方らにはここの離れ

に居てもらっぞ」

「おお。それは大丈夫だ！」

明日の作戦のことを聞き暖羅たちは出ていき一刀とフィリアたちは離れに明日の朝まで居ることになった。

「うっん。なかなか居心地が良いところですね」

「たしかにそうですね。」

「？一刀殿、どうなされましたか？」

「いや、さすがに色々ありすぎて少し疲れた・・・」

「ふふ。たしかに、こちらにきてからは賊らしき男たちを嚇し、慮植様たちに出会いここまで来て陛下と謁見されましたからね」

「うん。（〇）ふぁ・・・眠い」

一刀が眠いと言った瞬間、フィリア、ウイリア、フリー、ドーリアが目光を光らせお互いに牽制しあう。

（（（（一刀（主）（当主）様（殿）の膝枕をするのはわたしです（だ）））））

すると、一刀は右に倒れていく、なので、自然と右に座っていた者の膝に頭を乗せることになる。右に座っていた者とは・・・

「！！一刀殿！そ、そんなに私の膝枕を欲していたのですね（〃＾〇＾〃）」

「・・・なんでそうなのよ！！！！」

フィリア、ウイリア、フリーはドーリアを羨ましそうに見ている。そのドーリアは一刀の頭を撫でながら恍惚した顔で「えへへ一刀殿？気持ち良いですかあ？」と上機嫌である。

数刻後

離れの部屋に慮植が入ってきた。

「失礼しますね。あら？一刀くん寝ているの？」

「これは慮植さん。当主様になにか御用ですか？」

「えへへへ～一刀殿～」

「はあ～・・・ドーリア、いい加減に目を覚まさない！」

「へへへ・・・あ、あれフィリア？あれ、私と一刀殿の子どもたちは何処にいった？」

「ドーリアちゃん。さすがに～妄想飛ばしすぎです～」

「え・・・あつ！いや、その、あの、い・・・いまのは・・・」

ドーリアの慌てている姿を見て慮植はさすがに我慢ができなかった。

「ぷ！あははは！ドーリアちゃん可愛すぎる～あははは！！」

「！！！！／／／慮植殿！？こ、これはお見苦しいところをおみせ・・・」

「ふにや！！！」

ドーリアがいきなり立ったので一刀は床に転がり落ちた。

「か、一刀殿！申し訳ございません！大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫・・・」

「ふふふ。おもしろいわね～」

「？慮植さん？どうしてここにいますか？」

「あ、そうそう。あなたたちが可愛くておもしろくて忘れるところだったわ。一刀くん、あなたに会いたって娘がいるの」

「俺にですか？」

「ええそうよ。会ってくれるかしら？」

「別にいいですよ」

「それで、管輅さん？俺に何か用があつたのですか？」

「は、はい。実はわたし、あなたのことを夢の中で調べさせていた
だきまして、それで〴〵その〴〵／／／／／／／／／／」

一刀が管輅に質問すると何故か管輅は顔を赤くしてうつむく。

「ふふふ。一刀くん。管輅ちゃんはね、あなたに一目惚れしたのよ」
「！！／／／／／／／／／／りよ、りよしょくさま！？あれだけ御遣い
様には言わないでって約束したのに！ひどいですいゝ（p|q）
シクシク」

「ああ、ごめんなさい。だから泣かないでゝ」

真つ赤になつて泣き出す管輅と慰める慮植を見て、コミカルなシー
ンだなあと思つてしまう。

「それで、俺はどうすれば」

「あ、あの御遣い様！！」

「俺のことは好きなように読んでいいよ。だから、その御遣い様つ
てやめてくれないかな」

「す、すみません。それでは、一刀様とお呼びさせていただきます。
それですね、一刀様にわたしの真名を授けようと思つております
！」

「ちょ、ちよつと管輅ちゃん！？あなたそれは・・・」

「慮植さん、心配してくれてありがとうございます。ですが、わた
し覚悟を決めました。わたしは一生このひとを支えていくと！！」

「・・・そう。わかつたわ管輅ちゃん。あなたが決めたことだもの
ね、頑張りなさい！」

「あ、ありがとうございます」

「あのゝすみません。話がかなり逸れているんですけど・・・」

一刀が質問したはずなのに、また慮植と管輅によるコミカルなシーンが始まった。

「あら。ご、ごめんなさいね一刀くん」

「し、失礼いたしました！一刀様！」

2人はさすがに気まずいと思ったので謝罪をした。

「それで、管輅様。一刀様に真名を預けるってことはわたし達を信じるということでしょうか？」

「ああ、フィリアちゃん。管輅ちゃんの場合はちょっと特殊なの。

管輅ちゃんは占師なの」

「？それが一体何が特殊なのですか？」

「占師の場合はね、真名を授けるのはその人の伴侶もしくは生涯を尽くす人にしか授けない決まりごとがあるの」

「……！！！！！！……」

管輅がやろうとしたことは、一刀の従者になることだと全員わかった。そこまでしてでも、管輅は一刀の傍にいたいと願っている。

「そんな大事な真名を俺に授けても良いのかい？」

「はい！わたしは一刀様ならこの身を捧げる覚悟があります」

「そこまで思っていてくれたのか……よしわかった！！管輅、キミの覚悟を受けとめるよ！！」

「……ありがとうございます……！わたしの真名は梓あすなと言います。みなさん、どうぞわたしのことを真名で呼んでください！」

「管輅ちゃん、わたしまで良いの？」

「はい！最初から、管輅様にも教えようと思っていたので」

「分かったわ。それじゃあ梓ちゃん。わたしの真名は松すずなよ。一刀くんもフィリアちゃんたちもわたしの真名を預けるわ！」

暖羅に妹がいたとは知らなかった一刀。しかし、フリーたちは（この世界がもしあの三国志と同じなら）と考えている。

「へえゝ妹かあ。俺にも妹がいるぜ。良いぜ、暖羅の妹に会うよ。」

「おおそうかそうか。それじゃあ呼んでくるでな。おい！入っておいで！」

「失礼いたします！」

暖羅の許可で入ってきたのは一刀と同じ年頃の少女で、髪は桜色で背中まで伸ばしている。

その娘を見たとき一刀に衝撃が走った。

（！？なんだこの感じは？）

「初めまして、御遣い様！わたくし、暖羅お兄様の妹で劉協と申します。姓が劉、名が協、字が心麗です。以後お見知りおき・・・を・・・

」

顔を上げると一刀と目が合い劉協にも衝撃が走った。

（！？この人が天の御遣い様である一刀様・・・なんだろう感じは・・・嫌な感じじゃない）

北郷一刀と劉協の出会い

この出会いが2人の運命の歯車がようやく動き始めた・・・

第7話：一刀、運命の人に会う（後書き）

どうも

wingzeroです

いかがでしたでしょうか？

「運命の人」・・・いい響きですねえ・・・

さて、次話は一刀たちが遂に作戦を
決行する話です！

その前に、一刀たちと劉弁たちの
会話を入れる予定なので

少し長くなるかもしれませんが！

次話もよろしくお願いします！！

第8話：作戦前夜、そして・・・（前書き）

一刀は劉協と出会い

そしてひと時の休息をする

第8話：作戦前夜、そして・・・

「当主様？どうなさいましたか？」

一刀と劉協が互いに目を合わせたまま動かなかった。
フリーは、一刀が全く動かなかったのを不思議に思った。

「！？い、いや・・・大丈夫だ・・・初めまして劉協さん。俺は北郷一刀、姓が北郷で名が一刀です。字はありません。これからよろしくね」

「・・・・・・」

「？どうしたのじゃ？」

「！？い、いえ・・・何でもありませんお兄様・・・こちらこそ、よろしく願いいたします。御遣い様」

一刀と劉協は互いの質問にあどけない返事をし挨拶を交わす。

「えーと・・・御遣い様は・・・」

「ちよつと待つて、その御遣い様は止めて欲しいんだけど」

「し、失礼いたしました／＼で、では・・・一刀様とお呼びさせていただきます。ただいてもよろしいでしょうか？」

「お、おう・・・それでいいよ」

どこかぎこちない一刀と劉協。その2人を見て暖羅は気がついた。
(この2人・・・もしかして・・・)

暖羅は2人の様子を見て笑顔になる。

「どうじゃ？一刀、朕の妹は？可愛いじゃろ？」

一刀が尋ねると、部屋にいた女性全員が深い溜息をついた。

「いやゝあそこまで恥ずかしくなった心麗を見たのははじめてじゃ」

1人妹思いな暖羅が兄バカ発言をした。

数刻後ゝ夜中ゝ

豪華な晩飯を頂いた一刀たちは、風呂も入り明日の作戦のことについて話し合っている。

「一刀殿？明日のことについてですが・・・」

「うん？明日のこと？明日の作戦のことなら頭のなかにたたきつけているけど？」

「いえ、そういう意味ではありません一刀殿」

「そうですね、当主様？明日は私たち本気で戦ってもいいのですか？」

「ああゝ。そういうことかゝ。別にいいんじゃないか？明日の作戦で俺は天の御遣いで、ドーリアやフリーたちは精霊王であることを十常侍と民に知らしめるんだろ？だったら、普段の力を使っても問題ないだろう」

一刀は、フィリアたちに普段の力を使ってもいいと許可をだした。

「わかりました、一刀様。それでは、明日のために私たちも休ませていただきます」

「主様ゝお休みなさい」

お休みというとフィリアとウィリアは、それぞれ一刀の頬にキスを

して姿を消した。

「では、当主様。お休みなさい」

「一刀殿、本日は夜更かしをせず十分にお休みくださいませ」
フリーとドーリアも一刀の頬にキスをして姿を消した。

これは、一刀とフィリアたちと決めたいつもの習慣である。

「う、うゝん。よし！寝る前にいつものをしてから寝よう」

すると、離れの庭に出て岩の上に座る。そして一刀は、呪文を言う
と手に龍笛があらわれた。龍笛は、銀色でできており、赤・青・緑・
茶色の宝石が装飾されている。

龍笛をだすと、一刀はいつものように笛を吹く。

宮中内へ劉協の部屋へ

「まったく！お兄様はどうしてわたしをはずかしめることばかりするのですか！！」

「いや、あの、心麗さん！？わたしが悪うございました！お願いですから機嫌を直して部屋から出てきてください！！」

劉協は、自分の部屋で閉じ籠っている。その兄、劉弁は先程のこと
で劉協が起こっている侍女から聞き部屋の前で数刻間謝り続けている。

（全く暖羅お兄様は！！一刀様の前で恥ずかしい思いをしたじゃないですか／＼／＼／＼流石に今回は許しませんよ！！）

劉協は、兄である暖羅にいつまで謝らせるか考えているとき、謎の
音色が聞こえてきた。

（？この音色は一体・・・外から？）

窓を少し開けていたので、音色が聞こえてきた。気になった劉協は
窓をゆっくり開け外を見してみる。すると、離れの方向の庭で同い年
の少年こと一刀が笛を吹いていた。

（一刀様！？）

とつさに窓から身を隠す劉協。（ど、どうして隠れる必要があるの！？別にやましい事なんかしていないのに・・・）

もう一度、一刀のほうを見てみる。たしかに一刀が笛を吹いている。（横の笛かしら？でもあの笛、とっても神秘的なものを感じるわ。それにしても・・・ふふっ。一刀様はとても楽しそうに笛をお吹きになられているわ）

しばらく劉協は一刀のほうを見ている。すると、一刀の周りに何かが見えた。（？何かしら、あれ？何かばやけて見える・・・）

劉協は一刀の周りに見えているものを不思議に感じていたがとても嫌な感じにならなかった。

離れの庭へ一刀へ

龍笛を吹いていると周りになにかが集まる気配を感じた（お？もしかして・・・）一刀は閉じていた目を開いた。すると、様々な精霊たちが集まっていた。

（おおーやっぱり、この世界にもいたか。こんばんは（＾ー＾）ニコッ）

念話で挨拶をすると、精霊たちは一刀が精霊を正しく導くものと感じ返事をする。たくさんの精霊たちが一刀に念話で話しかける。

（へえーそうなのか。うんうん・・・ハハハッそんなことがあったのか）精霊たちと他愛無い話をきいている。すると、1匹の精霊がこれから起きることで一刀を心配している。

（うん。大丈夫だよ。俺にはキミたちの王である精霊王が4人いる

からね）精霊王がいると聞くと精霊たちはまた大はしゃぎする。これまで精霊を従えてきた人間を何人か見てきたが、精霊王を従えている人間に会うのは初めてなのだ。

（だから、みんなは安心してね。）

一刀に言われ精霊たちは安心するとみんな自由に飛んでいった。

「さて、寝るか……？……劉協さん！？」

視線を感じ、視線の方を見てみると劉協が部屋の窓からこちらを見ていた。

「あ、あの……その……い、良い音色でした／＼」

「あ、ありがとう劉協さん。そ、それじゃ、おやすみ」

「お、お休みなさい／＼／＼」

お互いにお休みと言えた2人。その後2人ともなかなか寝ることができなかった。

く長安く

「まったく！こんな朝早くから集まれだなんて、陛下は一体何のようよ」

豪華な馬車に乗って文句を言っているのは、十常侍の筆頭である張譲。彼は、昨晚陛下からの緊急の召集がかり向っているところだった。

「今日は、洛陽を治めている董卓に色々と手回ししよう思っていたのに……ああもう！！ちょっとあんだ！いつになったら城に着く

のよ！早くしなさい！！」

「す、すみません張讓様！もうしばらくお待ちください」
「全くもう！！」

半刻後、張讓は長安の城に着き玉座の方へ向う。すると、すでに他の十常侍たちが集まっていた。他にも武官や文官がいるが、そいつらは全く興味がない。なぜなら、自分たち十常侍の私利私欲しか考えていないからである。

「劉弁陛下が入られます！！」

すると、1人の兵士が陛下の入室を知らせる。玉座にいた私を含め全員跪き臣下の礼をする。

「うむ。みな、急な収集ですまない。事は急を要することが起きたのじゃ！」

陛下の口から急を要する出来事が起きたと聞き、その場にいた全員が驚き騒ぎはじめる。（はて、急を要すること？わたしはなにもしていないぞ）張讓が他の十常侍のほうに目を向けると、全員「わたしは知りません」という顔をする。一体何が起きたのか。すると、1人の武官が陛下に聞いた。

「恐れながら陛下、急を要する出来事とはいったい何なのですか？」
「そうです。陛下。この張讓も急を要することを存じ上げません。一体何が起きたのですか？」

張讓が1人の武官の言葉にのっかり何が起きたのかを聞く。

「おう、張讓か。今に教えよう！それはじゃのう・・・」

「お主等十常侍を捕らえることじゃ！！！」

バン！！！！

劉弁が大声で言うと同時に扉が勢いよく開いた。すると、たくさんの兵たちと、みたことのない白く光る服を着た男と赤・青・緑・茶色の髪をした4人の女性が入ってきた

ついに、十常侍を捕らえる作戦が始まった！！

第8話：作戦前夜、そして・・・（後書き）

今回は少し短いです・・・

ここで、一刀の趣味を1つご紹介

お分かりかと思いますが

一刀は楽器を演奏することが大好き！

という設定にしています

なにか良い楽器ないかなあ

と考えていたら横笛を思いつきました

え？なんで横笛かだって？

・・・なんか、神秘的で良いなあと思いました・・・

さて次話はいよいよ作戦が開始します。

次話ではあの人たちが出てきます！！

おたのしみに！

第9話：天の御遣い（前書き）

遂に始まった作戦！！

一刀は天の御遣いとしての

威厳をだす！！

第9話：天の御遣い

「覚悟しろ！十常侍！」

「お前らも今日で終わりだ！！！」

兵士たちが次々と十常侍を捕らえ始める。

「な、なんだこれは！？」

「おい、張讓！わ、わたしたちはどうすればいいのだ！？」

「うるさい！わたしだって何が起こったのかわからないんだ！」

突然の出来事に流石の張讓も動揺している。そんな中、最後に残ったのは張讓と2人の十常侍で計3人である。

「陛下！！これは一体何のマネですか！！わたしたちが何を・・・」

「うるさいぞ張讓！お主等十常侍が私利私欲のためにいろいろと悪事を行っていたことはとうの昔から知っておるのじゃ！！」

「・・・なっ！！！！」

今まで張讓率いる十常侍は善政を行っているふりをし、裏で自分たちにたくさん利益を得ていることを劉弁陛下が知らないように行動していたつもりだった。しかし、どうやら劉弁陛下たちは独自の情報網で彼らの悪事を把握し証拠を掴んでいたようだ。

「く、こうなったら逃げるしか」

「お、おい張讓殿！？」

「1人で逃げるのかえ！？」

張讓はやけになったのか窓から逃げ出した。張讓に続き2人の十常

侍も窓から逃げる。

「なんと！あやつら窓から逃げよったぞ！？」

「予想外でしたね。彼らは我が身大事という考えをしているのでここから逃げるとは思いませんでした」

「おいおい長官殿、大丈夫かいの？」

「あんしんせい爺。城前に逃げてもすぐに捕まるぞ」

「おっとそうでしたのう」

・ 部屋に入っていたはずの一刀とフィリアたちはすでにいなかった・

（城前）

「はあはあ、クソッ！！あの餓鬼があ」

「はあはあはあ、張譲殿待つてくだされ」

「来るなら早く来なさい！！あの馬車で逃げるわよ！！」

張譲たちはとにかく逃げることにしか考えていなかった。そのため、張譲が乗ってきた馬車に細工をしているなんて思っていなかった。

「はあゝここまでればなんとか・・・」

「そうですな・・・」

「ふうゝ・・・ん？おい！早く出さんか！！！」

張譲は窓から顔を出し早く出せと命令をする。

「それはできないねえ」

「！！！！！！！！」

前にいたのは光り輝く服を着ている少年だった。

「な、なんだ貴様は!？」

「わたしの部下はどこに!！」

「それってこのひとのこと?。」

声がした方に振り向くと、200人の張譲らの部下が山のように積まれていた。兵士の山の前には赤・青・緑・茶色のそれぞれの髪の色をした4人の女性がいた。

「ひ、ひいゝ!！」

「よ、妖怪!！」

「失礼ですね、私たちは妖怪なんかではありません!」

「私たちはそこにおられる天の御遣いの北郷一刀様の従者、精霊王だ!！」

「何!?!?!」

「天の御遣い!？」

「精霊王だと!？」

張譲たちはもう一度少年を見る。

「俺は北郷一刀!天より舞い降りし乱世を鎮める御遣いなり!！お前らは天に対し意に反する行為をした。そのため俺が天の代わりに裁きを下す!！ファイリア!！」

「はい!！」

すると一刀はファイリアを呼び、手を重ね精霊術を発動した。

「精霊術・カサネ!！」

発動するとフィリアは消え、変わりに一刀の武器である刀が赤く輝きだす。

「我が火の精霊フィリアの力でお前らを業火の裁きを行っ！！覚悟はいいか！！！」

一刀は刀を鞘から抜き構える。すると、刀の周りに火が螺旋に浮かび上がる。

「ま、まってくれ！！！」

「そ、そうだ！金をやる！金をやるから殺すのはやめてくれ！！！」
「・・・・・・・・わかった・・・・・・・・お前らを殺すのはやめよう」

張讓たちの命乞いに答えたのか、一刀は構えをやめる。

「ふうゝ助かった」

「ほ」

「だが！！お前らは罪なき民たちを苦しめた！これは事実である！
！よって俺ではなく劉弁皇帝陛下の裁きを受けよ！！！」

「なっ！！待て話が違うではないか！！！」

「そうだ！見逃してくれるのではないのかい！？」

「誰が見逃すなんて言った！俺はただ殺すのをやめると言ったただけだ！さあ皇帝陛下！彼らに裁きを！！！」

「うむ！！よくやってくれた！天の御遣い、北郷一刀よ！！！」

一刀が劉弁陛下に道を開け臣下の礼をとる

（どうだ？暖羅。なかなかの演技だろ？）

（今のは演技だったのか！？朕は少し怖かったぞい）

「張讓！ならびにその者たちを牢にぶち込め！！」
「ハッ！！！！」

劉弁が命令するとすかさず兵士たちが張讓たちを縄で縛り、牢に連れて行く。

「皇帝陛下！なにとぞ！なにとぞ慈悲を！！」

「陛下！良いのですか！わたしを牢に入ればこの先漢は暗黒の時代になりますぞ！」

「馬鹿者が！！お前らはまだ気づかぬのか！！お前らが行ってきたことです！にこの大陸は乱世の時代に入ろうとしておるのじゃ！！」

「しかし、劉弁陛下！！」

「くどいぞ張讓！おとなしく牢に入れ！」

兵士たちが暴れる張讓たちを牢へ連れて行く。

「ふう〜これで十常侍たちの思惑が終わる。ありがとう一刀よ。」

「いやいや、あれぐらいお安い御用さ。」

暖羅の礼に答えながら一刀はカサネを解くと、フィリアが一刀の横に現れる。何故か顔が恍惚としている。

「大丈夫？フィリア？」

「ハアハア／＼はい、大丈夫です／＼」

フィリアは大丈夫とっているが一刀を見る目は何故か色っぽい。
ウィリア・フリー・ドーリアはフィリアを羨ましそうに見ている。

「陛下！すべての張讓を牢に入れました！」

「ごくろう長官！皆のもの大儀であった！これでしばしの間じゃが

漢に平和が訪れるぞ！！」

「その平和はこの俺、天の御遣いこと北郷一刀が保障しよう！！そして平和を乱すやつは片っ端から俺が倒していくことをこの刀にそして天に誓おう！！」

暖羅の皇帝としての器を兵士に見せ付けると、一刀も御遣いとしての器を見せる。一刀の器を垣間見た兵士たちは一刀に敬意と畏敬の眼差しを受ける。

この事件は、管輅こと梓の導術によって漢の全大陸に伝わる。内容は「天の御遣い皇帝劉弁陛下と共に十常侍を捕縛！天の御遣いとしての器を見せ付けた！！」と。伝わったことによって諸侯たちの天の御遣いに対する思いが動き出す。

第9話：天の御遣い（後書き）

更新が遅くなって申し訳ございません！

どのような内容にしようか

とても迷っていました！

次話は作戦が終わった一刀たちの
宴をかこうかなと思います

追伸

前話の後書きで

あのキャラがでると言いましたが

執筆の都合により出す予定がなくなりました！

申し訳ございません！！

あと、顔文字を使わないほうが良いと

ご指南がありましたので

これから顔文字を使わない方向で行きます！！

第10話：平和への宴、新たな出会い（前書き）

十常侍を見事捕まえた一刀
その後長安で宴が始まる

第10話：平和への宴、新たな出会い

今朝からの作戦が無事終了し、事務処理も終わったので城内で宴が始まった。

「それゝ飲めやゝ歌えやゝ」

「あゝそれは俺が狙っていた肉だぞう！ヒック」

「くそ俺なんか、俺なんかあゝゝゝ」

[illegible]

宴では、酒を浴び皆笑顔ではしゃいでいる。

「ふおつふおつふお。皆も十常侍からの恐怖というなの呪縛が解けて羽目がはずれたのじゃな」

「そうじゃな。そんなことより爺よ、もっと酒を飲もうではないか」

「お？珍しいですな、陛下から酒の誘いとは。いいでしょう、この爺、まだまだ若いものには負けておられません」

「うむ、では飲もうか」

「ちよ、お待ちください陛下！明日はとても大事な政があることをお忘れですか？」

「?なんじゃったかの・・・」

「つてもう酔っ払っているし」

劉弁こと暖羅はすぐに酔ってしまう体質である。

「りょうかん。なんだか、朕の体がとても熱いんじゃないか?」

「ダメですよ！？あなたは皇帝陛下ですよ！皇帝ならば皇帝の威厳

を
・
・
・
└

「ちょっとだけじゃ」

「だから脱ぐんじゃねえ〜!!!!!!」

長官は暴走しだした皇帝を止めるのに必死である。

「もう、お兄様は！ 普段は皇帝としてしつかりしているのにどうしてお酒の席ではいつもあんなるでしょう・・・」

「しかたありませんよ劉協さま。なんせ、劉弁陛下ですから」

なんか納得いかない劉協であつた。

「ところで、一刀様は？先程から姿が見えないのですが・・・」

「ああ、北郷様なら精霊王様たちと何か催しをするからと部屋を出て行かれましたよ」

「催し？何をするのかしら。お兄様。お兄様！！」

「ういゝ……ん？ おお我が愛しい妹よ！ ……どうしたのじゃ？」

「ちよっ お兄様！かなり酔っているじゃないですか！」

「ぜえくんぜえくん酔ってないによら」

「はあ……もういいです」

劉協はお兄様に聞くことが無理だと思い長官に聞きに行った。

「北郷さんですか？彼なら歓迎してくれた御礼にと天の国の伝統舞踊を見せてくれるとか」

「それはいつたい……（ピュルル〜）？」

突然音色が聞こえた。

「何の音ですか？」

「この音色は確か昨晚の」

部屋の扉が開くと白い袴を着て透ける羽織を被った一刀とフィリアたちが入ってきた。

一刀は龍笛を持ちフィリアたちは神楽鈴を両手に1つずつ持っている。一刀を囲むようにフィリア・ウィリア・フリー・ドーリアは膝をつく。

「お？なんじゃなんじゃ？」

「しっ！お兄様静かにしてください！！」

劉弁が一刀たちに気づき声を掛けに行こうとしたが、劉協に襟を掴まれ首を絞められていた。

「こ、こりや妹よ！？くびが、くびが」

「あ！？こ、ごめんなさい」

劉協が慌てて兄の襟をはなす。

シャラン、シャラン、シャラン

ピィ〜リユリユ〜フユ〜

一刀たちの催しが始まる。部屋にいた全員が一刀たちの催しに釘付けになった。劉弁や劉協だけではなく、武将・文官・兵士・侍女までもが一刀たちに釘付けである。

一刀を中心にフィリアたちは右回りに動き出す。

一刀は龍笛で演奏しながら移動する。一刀が動くと同時にフィリアたちも一刀との距離を保ったまま右回りで動き出す。

シャラン、シャララン

少しすると、精霊王たちの周りが輝きだす。すると、精霊王たちから4体の龍が現れた。

部屋にいた全員突然のことで驚くが事前に聞いていた長官が「あれは精霊王であるフィリアさんたちができる技だそうです。なので全員慌てなくてもいいですよ」と言うので全員落ち着いて一刀たちの舞踊を見続ける。

そんな中、劉協だけは驚くことなく一刀とフィリアたちを見ている。

「すごい、フィリアさんが赤の龍でウィリアさんが青の龍、フリーさんが緑の龍でドーリアさんが茶色の龍・・・あれも精霊なのかしら？」

4体の龍はそれぞれの精霊王を螺旋状に纏い一刀のほうを向く。

シャラン、シャララン！！

フィリアたちの一番強い鈴の音色を出すと4人は膝をつき一刀のほうを向く。

ピュルルルリユリユ

一刀が1人で演奏をすると4体の龍が一刀に纏うと光り輝く1体の龍になる。その龍の姿はその場にいた者たち全員がこう言う「あれはまさしく天の龍！」「天の御遣い様は龍を従う龍帝そのもの」など色々な通り名がついたりした。

光り輝く龍が小さな咆哮を上げると龍が消え一刀たちの舞踊も終わる。

一刀たちが礼をすると割れんばかりの拍手があった。

「一刀の部屋」

「ふう〜疲れた〜」

「主様〜ウイリアも疲れたの〜」

「ここらウイリア、今日はダメですよ」

「そうだとウイリア。一刀殿はこれから……………はあ〜・フィリアがうらやましい（シクシク）」

「ドーリア、そうめげないの。今回は私だったけどよほどのことがない限り今度はあなたでしょ？」

「ハッ！！そうだった！一刀殿！！今度はぜひ私を纏ってくださいね！！！」

「お、おお……………わかったよ」

「……………本当にわかりまし？」

「ドーリアちゃん〜あまりしつこいと主様に嫌われるよ〜」

「そ、それだけはイヤだあ！！！！！」

「おちついてドーリア。当主様はそんな人ではないと私達が一番知っているでしょう？」

「フフ。ドーリア、ウイリア、フリー。今日はもう疲れたでしょ？早く休みなさい」

「そうだと。明日から忙しくなるんだから」

「はい。わかりました〜。おやすみなさい主様」

今回はウイリア1人だけが一刀の頬にキスをする。

「では当主様、お休みなさいませ。ほらドーリアも」

「うう〜。かじゅと殿。お休みなさいませ」

フリーは昨日と同じで、ドーリアは半泣きで一刀の頬にキスをする。

「ふう〜ドーリアも相変わらずだよ〜」

「そうですね。それより一刀様？わたしたちもそろそろ・・・」
「ああそうだね。それじゃ一緒に寝ようか」
「はい！一刀様！！」

一刀とフィリアたちはいくつの契約をしている。その内の1つで、精霊王を纏った日は必ずその精霊王と寝ることである。

「フィリア・・・ちゅっ」

「ああ～一刀様～」

2人の夜は長かったようだ。

（朝・玉座）

朝起きて一刀とフィリアたちは朝食を食べ玉座に向う。すると、暖羅が「実はお願いがあるのじゃ」と言ってきた。

「なんだ暖羅。なにか事件か？」

「いやいや事件じゃないぞ。実はこの勅書を持って洛陽の董卓に会って欲しいのじゃ」

「董卓にですか？」

「これはまた・・・」

「？フィリア殿、フリー殿。なにかございますか？」

「いえ、何でもありませんよ長官殿」

「それで、一刀よ。行ってくれるのかい？」

「ああいいぜ。どうせこの大陸を回らなきゃいけないからな」

「うむ。それじゃ頼もつかの。それと、一刀には馬をあげようと思う。好きな馬を連れて行ってもいいぞ」

「おおありがとう暖羅！こっちの馬って利口だからとっても乗りやすいんだ」

暖羅の饒別に馬を貰える事になった一刀はすぐに馬を見に行きこの前にも乗った白馬を貰うことにした。

フィリアたちは基本的に馬などが必要ないので何も貰わなかった。

「それじゃ気をつけての一刀よ」

「一刀さん、これが勅書とあなた達のことを記した書です。必ず董卓殿に渡してくださいね」

「気をつけていくのじゃぞ～一刀」

暖羅と長官は俺にしっかりと挨拶をする。爺は………まだ酒を飲んでいる。

「それじゃ～いつてきま」

「一刀様～！お待ちください！！」

行こうとした矢先に劉協に呼び止められた一刀は馬からズルツと落ちそうになった。

「な、なにかな劉協さん」

「あ、あの……これを……」

劉協が一刀に渡したのは1つのお守りだった。

「これは？」

「それは、一刀様たちが無事に戻ってこられるようお願いをこめたお守りです」

「ありがとう、劉協さん」

「そ、それと一刀様！わたしの真名を授けてもよろしいでしょうか？」

結局一刀たちは少しも休憩ができず城の方へ入っていく。

く洛陽・玉座く

「董卓様、華雄です！！天の御遣い様と精霊王様たちを連れて参りました！」

「どうぞ、入ってください」

「失礼いたします」

華雄が扉を開け中に入るので続けて一刀たちも玉座に入っていく。玉座にいたのは、紫色の髪で後ろ髪を纏め上げているサラシを巻いたかなり露出の高い女性と、赤い髪でショートボブで3本ほど髪の毛が立っている眠たそうにしている女性、明るい緑色で昔の制服の帽子を被っている女の子、玉座の横に立っている深緑色の髪で長い髪を途中から三つ編みにしている眼鏡を掛けた女の子、そして玉座に座る薄青紫色の髪で肩まで伸ばしウェーブがかかっている女の子。全員が俺のほうを見ているが、その意図は様々である。

（な、なあみんな。もしかしてあの女の子が董卓？）

（ま、まさかそんなことは・・・）

（さすがにありえないですよ）

（というかここにいる人たち全員女性ですね）

（もしかしてこの人たちの中に呂布や張遼がいるのですかね）

（（（（（・・・まさかあ）））））

「初めまして、天の御遣い様に精霊王様がた。わたしは、ここ洛陽を治めさせていただいている董卓と申します。よろしく願いいたします」

と董卓と挨拶した女の子は丁寧にお辞儀をした。

() () . . . うそだあああゝゝゝゝゝ!!!
(!) (!) () . . . !!!!

念話でシンクロした一刀たちであった。

第10話：平和への宴、新たな出会い（後書き）

ども

なんか話が複雑になっているようなっていないような・・・

次話ではまともな話を書けそうです！！

では、次話で会いましょう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3244x/>

恋姫無双～新・外史～

2011年10月21日01時39分発行